

3	瀬戸	幡山東小学校
分科会番号	3	分科会名 小学校社会

○	はせがわしゅんすけ 長谷川 俊介	(幡山東小学校)
	いちかわ ゆうじ 一川 裕司	(水南小学校)
	たかす さとし 鷹巣 哲司	(東山小学校)
	せ 古 あつし 世古 篤	(掛川小学校)

自ら学ぶ力を高め、学習に楽しさを感じることができる児童の育成 —小学6年社会 歴史的分野の学習を通して—

1 はじめに

急速な社会変化と技術革新により、私たちを取り巻く環境は多様化している。人工知能の発展やグローバル化が進み、予測困難な未来に対応できる力が求められている。受け身の姿勢で生きていくのは難しい時代になりつつある。こうした背景のもと、文部科学省は「令和の日本型学校教育」を掲げ、すべての児童たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」を重点的に推進している。

また、「個別最適な学び」については、令和3年の中教審答申では「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童が自己調整しながら学習を進めていくことができるように指導することの重要性が指摘されている。

瀬戸市小中学校社会科研究会では、「未来を切り拓き、豊かな社会を創り出す社会科学習」のテーマのもと「様々な社会的事象において、自ら課題を見つけ、主体的に追究して考える中で自分の意思を決定する力」の育成を主題に掲げ、研究・実践を積み重ねてきた。本会の掲げる「自ら課題を見つけ、主体的に追究して自分の意思を決定する」ための実践を進めるには、特に追究課題の設定において個々の児童の興味関心や意欲に教師が寄り添い、児童自身が課題や追究方法を選択できる手段をとることが不可欠である。つまり、社会科の各単元の学習においては、先に示された「指導の個別化」と「学習の個性化」の具現化、およびその実践方法の研究を進める必要があると考えられる。

2 主題設定の理由と目指す児童像

本学級(小学校6年生30名)の児童は真面目で素直な子が多く、教師から与えられた課題にはおおむね誠実に取り組む姿勢を見せている。しかし、学習に対しては受け身な姿勢が見られ、積極的に学ぼうとする姿はあまり多く見受けられない。

今回の実践前に学級内で実施した学習に関するアンケートでは、「自ら進んで学習に参加している」という問いに対し、「はい」と回答した児童は10名にとどまった。また、「学ぶことは楽しいと感じているか」という問いに「はい」と回答した児童は9名のみだった。およそ3分の2の児童が自ら学ぶという点において十分ではなく、学習に対して肯定的な感情を抱いていないことが分かった。このアンケート結果の背景には、学習の進め方が教師主導であることや、児童が自分の関心に応じて学べる機会が少ないことが影響していると推察される。さらに、「社会科の学習は難しいと感じている」という問いに「はい」「どちらかというとはい」と回答した児童は16名だった。分からないから楽しくないと感じている児童も多いことが想像できる。

このような学級の実態を踏まえ、児童一人一人が学習への主体性を高め、自ら学ぶ力を育むとともに、児童が「学習することは楽しい」と思える授業を行いたいと考えた。そこで、学習計画を自ら立て、自分のペースで学習が進められる自由進捗学習に注目し、本実践に取り組むこととした。

本実践では、目指す児童像を「自ら学ぶ力を高め、学習に楽しさを感じることができる児童」とする。2つの単元で自由進捗学習を取り入れ、「指導の個別化」と「学習の個性化」の視点から、さまざまな手立てを施すことによって目指す児童像に迫ることとした。また、学習が難しいと感じている児童でも楽しく学習が進められるように学習教材や学習環境を整えたい。1つ目の単元は6月に実施し、実践から得た成果や課題を活かして10月に実施する2つ目の単元の授業をブラッシュアップしていく。

3 研究仮説

自由進捗学習を行っていく中で、児童の特性やペースに応じて指導を行う「指導の個別化」と児童が興味・関心に合わせて学習活動等を選択できる「学習の個性化」が図られれば、自ら学ぶ力が高まるとともに、学習に楽しさを感じることができるだろう。

4 研究計画

(1) 研究の手立て

【手立て1】 自ら学ぶ力を高めるための手立て

- ① 学習計画表を用意し、児童が自分のペースに合った学習計画を立てられるようにする。
(学習の個性化)
- ② 児童が学習計画を立てる上で参考にできる「学習の手引き」を配付する。「学習の手引き」には学習問題や自由進捗で学習ができる時間数、参考にとよ教科書のページや標準的な学習の流れ等を示す。
(学習の個性化)
- ③ 学習計画表に振り返りの欄を設け、児童が授業の終わりに毎回学びを振り返ることができるようにする。また、自分の学習状況に応じて計画の見直しができる機会を設ける。教師は児童の学習計画や振り返り

- 振り返りを見取り、必要に応じて学習のペースや計画に助言をする。（指導の個別化）
- ④ 学習につまずくことが予想される児童も学習が進められるように、プリントにヒント動画の二次元コードを載せる。（指導の個別化）

【手立て2】 学習に楽しさを感じられるようにするための手立て

- ⑤ 児童が自分の特性や興味・関心に応じた学習方法を選択し、展開できるように複数の学習コースを設定する。（学習の個性化）
- ⑥ 学習内容の応用や学び直しをしながら自分の興味・関心に合った活動に取り組める発展問題を設定する。（学習の個性化）
- ⑦ 児童が学習内容を身近に感じることができるよう、地域教材を活用する。（学習の個性化）
- ⑧ 希望する児童を対象にミニ授業を実施し、つまづきを解消することで、学習に前向きな気持ちをもてるようにする。（指導の個別化）

（2）抽出児童の設定と期待される変容

児童A 何事にも活発に取り組むことができるが、学習全般に苦手意識をもっており、事前のアンケートでは、「社会の学習は難しいと感じている」という問いに「はい」と回答している。分からないことがあると自力での解決を諦め、他者に頼ろうとする場面が多い。本実践においては、見通しをもって学習に取り組み、分からないことがあってもヒント動画や学習の手引きを参考にして、自ら学習問題を解決しようとする姿を期待したい。

児童B 理解が早く知識も豊富であるため授業中に困る場面は見られない。しかし、自ら進んで学習する姿勢はそれほど多く見られず、事前のアンケートでは「進んで学習に取り組んでいる」という問いに「いいえ」、「学習にやられている感を感じている」という問いに「はい」と答えている。本実践においては、自分に合った学習方法や興味・関心に沿って取り組むことで、学習の楽しさを感じ取り、主体的に学ぼうとする姿を期待したい。

5 研究実践－「実践1」について

（1）単元計画

単元名：「縄文のむらから古墳のくにへ」8時間完了（6月実践）

段階	時数	学習活動と学習課題
導入	第1時	●学習問題を知り、学習計画表を作成する。 学習問題：米作りの影響で人々のくらしはどのように変わっていったのかを調べ、縄文から古墳までの時代のうつり変わりについてまとめよう。 ・自分に合った学習コースを3つの中から選択する。 〈各コースの概要〉 ①探検コース…教科書に沿ってプリント学習をしていく。 ②発掘コース…気になったことを調べ、タブレット端末やプリントにまとめながら学習をしていく。 ③冒険コース…自分で学び方を考えて学習を進めていく。指定のプリントはない。 ・学習のてびきを見ながら学習計画表を作成する。
自由進度学習	第2時～第6時	●自由進度で学習を進める。 ・縄文時代のむらのくらしの様子を捉える。 ・米づくりが始まったころのむらのくらしの様子を捉える。 ・米作りの広がりによって、むらがくにへと統一されていく社会変化を捉える。 ・大きな力をもった豪族や王が現れた古墳時代の様子をつかむ。 ・大和朝廷によって国土が統一されていったことを捉える。 ・チェックテストを受ける。 ・発展学習に取り組む。
まとめ	第7時	●調べたことをもとに学習問題について話し合い、学習のまとめをする。 ・学習問題についてグループで話し合う。 ・自分が立てた学習計画を振り返る。
	第8時	●埋蔵文化財センターの講師による授業を受ける。 ・愛知県や瀬戸市で発掘された土器等に直接触れる。 ・講師の方の話を聞いたり、質問をしたりする。

(2) 研究の実際

第1時 学習問題を知り、学習計画表を作成する

教科書のイラスト資料を見ながら、縄文～古墳の間で人々の生活や世の中の様子が大きく変化していることを学級全体で捉えた。その後、学習問題を共有し、今回の授業の進め方や各コースについて教師が説明した。①探検コースを選択した児童が19人、②発掘コースを選択した児童が4人、③冒険コースを選択した児童が7人だった。

児童Aは苦手意識から、教科書に沿いながら学習したいという思いで探検コースを選択した。児童Bは枠にとらわれず、自分の言葉やイラストを使ってまとめていきたいという思いで冒険コースを選択した。学習の手引きを見ながら、第6時までの学習計画を立てさせ、学習の途中で進度が計画とずれた時は二重線で修正させるようにした。

第2～6時 自由進度学習

それぞれが立てた学習計画をもとに、自由進度学習を始めた。学習の手引きに記されているページ数を見て、教科書や資料集をよく読み込むことから始める児童や、二次元コードの動画を見て学習をスタートする児童がいた。②発掘コースや③冒険コースの児童の中には、タブレットでまとめていく児童がいた。それぞれの児童が自分にとって学びやすいやり方で学習に取り組んでいた。分からないことがあると、友達に相談し解決する児童の姿もあった。

児童Aは同じコースを選んだ他の児童と比べて少し遅いペースで学習を進めていたが、計画表を修正し、学ぶペースを調整しながら取り組むことができていた【資料1】。また、ある程度学習プリントを進めると先生チェックがあり、チェックを受けるタイミングで、あまり理解できなかったところを質問していた。「大きな古墳が作られた理由ってなに？分からない。」と聞いてきたときには、よく読んでほしい資料集のページとおすすめの動画を伝えた。教師は答えを教えるのではなく、あくまでも自分で調べ、気付くことができるようにサポートした。第5時でチェックテストを終え、第6時は発展学習に取り組む、友達と一緒に粘土で埴輪を作った後、埴輪についてまとめていた【資料2】。

児童BはA4の紙に文章や図、イラストを用いて学習を進めていた。教師がタブレットを使っても良いと伝えたが、直感的に図やイラストを配置してまとめることができるようにあえて紙を選択した。



【資料2】児童Aが作った埴輪（左）



【資料1】児童A（左）と児童B（右）の学習の手引き・計画表・学習プリントの一部

この児童は、縄文人や弥生人の生活や道具に高い関心を持ち、深く知りたいところはタブレットで調べて、分かったことを追記していた。結果的に縄文～古墳まで、それぞれ1枚ずつの計3枚に分かったことをまとめていた。日頃の一斉授業では感じられなかった主体性が見られた。しかし、積極的な姿勢ゆえに多くの時間を要したため、学習計画表を見て教師と話し合いながらこの後の学習計画を修正した。その結果、発展学習への取り組みは見送り、チェックテストの終了までで学習を終えることとした。

第7時 調べたことをもとに学習問題について話し合い、学習のまとめをする

学習問題について分かったことをタブレットにまとめ、グループで共有した【資料3】。また、特に深く調べたことも共有し、互いに学びの補完をさせた。全体ではグループで気付いたことについて共有し、まとめとした。

また、授業の最後に今回の学習で自分が立てた計画は適切だったかどうかの振り返りをさせた。「発展学習の時間をもう少しとれるように計画すればよかった」「もう少し余裕をもって計画を立てればよかった」などの振り返りができていた。



【資料3】グループ活動の様子

第8時 埋蔵文化財センターの講師の授業を受ける

埋蔵文化財センターの方にお越しいただき、瀬戸市で発掘された本物の土器に触れたり、古墳や土器についての講話を聞いたりした【資料4】。また、学習をして疑問に思ったことに質問する時間を設けた。「土偶は海外でも見つっているのか」「家の庭で土器が見つかったらどのくらいの価値になるのか」等の質問をしていた。



【資料4】本物の土器に触れる児童

(3)「実践1」の成果と課題ー「実践2」に向けて

事後のアンケートで「自ら進んで学習に参加できた」という問いに対し、「はい」と回答した児童は24人で8割を超えた。「今回の学習は楽しく取り組めたか」という問いに対し、「はい」「どちらかというとはい」と答えた児童は26人だった。理由としては「自分のペースで気になることをじっくりと調べることができてよかった」というものが多かった。また、発展学習では、大仙古墳の実際の長さを調べ、縮小版を画用紙で作ったり、石を打ち砕いて石器を作ってみたりする児童もいた【資料5】。

しかし、①探検コースの児童で、プリントを早くこなすだけの児童がいた。また、学習への見通しがもてない数名にとっては難易度が高いように見えた。他にも、児童がもっと「学びたい・知りたい」と思えるような学習問題の設定が必要だと感じた。

実践1で出た課題を踏まえて、実践2では大きく2つの変更点を加えることにした。①第1時の導入を物語形式にし、子どもたちの興味・関心がより高まる学習問題の設定を行う。②定期的に教師がミニ授業を開く。ミニ授業に参加するかどうかは自由とし、学習への見通しがもてない児童には担任からミニ授業への参加を促すようにする。



【資料5】児童が打ち砕いた石

6 研究実践ー「実践2」について

(1) 単元計画

単元名：「戦国の世から天下統一」8時間完了（10月実践）

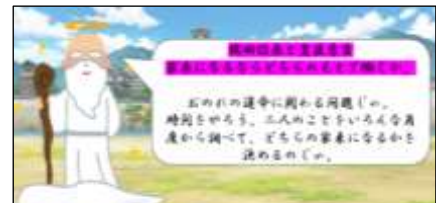
段階	時数	学習活動と学習課題
導入	第1時	●学習問題を知り、学習計画表を作成する。 学習問題：織田信長と豊臣秀吉 家来になるならどちらのもとで働きたいか？ - 自分に合ったコースを4つの中から選択する。 ※二人の武将の通知表（5観点）を作って比較する。以下の①②のコースは、観点が指定されている。③④は児童が観点を設定できる。 〈各コースの概要〉 ①主人見比べコース…教科書に沿ってプリント学習をしていく。 ②武将見極めコース…タブレット端末やプリントに文章や絵でまとめながら学習をしていく。 ③主君品定めコース…②のコースと同様。通知表の観点は自由。 ④天下採点官コース…自分で学び方を考えて学習を進める。指定のプリントはなし。 ・学習のてびきを見ながら学習計画表を作成する。
自由進度学習	第2時～第6時	●自由進度で学習を進める。 - 戦国の世の戦いの様子を捉える。 - 外国や宗教とのかかわりについて調べる。 - 信長について調べ、信長の通知表を作る。 - 秀吉について調べ、秀吉の通知表を作る。 - 二人の通知表を見比べて、どちらの家来になるのかを決める。 - チェックテストを受ける。 - 発展学習に取り組む。

まとめ	第7時	●調べたことをもとに、学習のまとめをする。 ・作成した通知表をもとに、どちらの家来につくのかをグループで意見交流をする。 ・自分が立てた学習計画を振り返る。
-----	-----	--

(2) 研究の実際

第1時 学習問題を知り、学習計画表を作成する

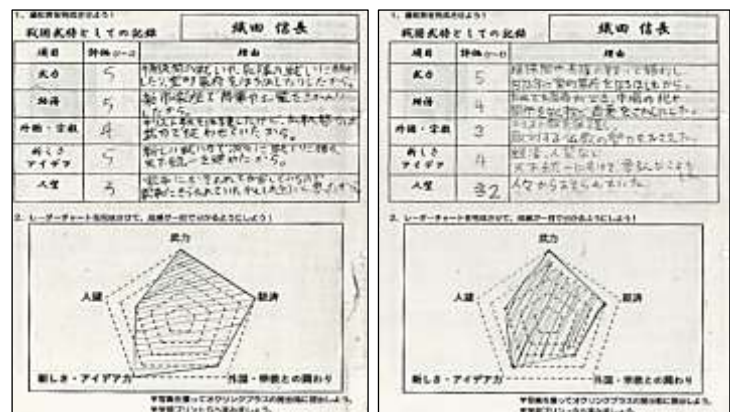
スライドで物語を見せながら導入を進めた【資料6】。自分がタイムスリップして戦国の世に行き、戦国の神から武士にならなければいけないことを伝えられ、「信長と秀吉、家来になるならどちらか」という学習問題を提示される。児童にどうしたらよいかと問いかけると、「調べて比べたい」という意見が出た。どのように比べたら分かりやすいかと問うと、数字にして比べたら分かりやすいという意見が出た。児童にとって身近な通知表を作って二人の武将を比較することにした。①のコースを選択した児童が12人。②のコースを選択した児童が6人。③のコースを選択した児童が4人。④のコースを選択した児童が8人だった。児童A・Bともに②のコースを選択した。児童Aは自分の言葉で調べたことを文章でまとめてみたいという理由だった。児童Bは6月の取り組みの際のことを思い出し、作業時間のことも考慮に入れ、指定のプリントがある②のコースを選択した。



【資料6】導入スライドの一部

第2～6時 自由進捗学習

縄文の単元と同様、様々な方法で学習を始める児童がいた。学校図書で戦国に関する本がたくさんあったので、本を読むことから学習を始める児童もいた。①と②のコースの児童は調べて分かったことを教師が設定した5つの観点(武力・経済・外国や宗教との関わり・新しさやアイデア力・人望)に分けてまとめ、観点ごとに5段階の点数を付けていった【資料7】。視覚的に見やすいようにレーダーチャートも作成した。③と④のコースの児童は自分で観点を決め、観点ごとに調べ、まとめて通知表を作っていた。家臣の強さや文化への関わり等、自分が気になる視点から調べ、通知表を作っていた。



【資料7】児童A(左)と児童B(右)が作成した通知表

児童Aはイラストや図などでまとめているが、教科書を読んでも十分に理解できていないところがあった。教師がミニ授業を開催すると参加し、分からないところは質問して理解を重ねていった【資料8】。チェックテストを終えた段階で学習時間の限りが来たため発展学習は行わなかったが、他者に頼るのではなく、それほどの時間をかけながらも自力で学習問題を解決しようと取り組む姿が見られた。

児童Bは1回目と違い、イラストや図はあまり使わず、文章でまとめている。その分、教科書や資料集をしっかりと読み込む姿が見られた。チェックテストを終えた後の時間で、興味をもった天下餅の歌について調べ、発展学習を終えた。児童A・Bともに発展学習をする時間が十分にとれなかったが、進んで学ぶ姿は見られた。また他の児童は、戦国の出来事をテーマにすごろくや替え歌を作ったり、戦国の世をテーマに劇の台本を作ったりする発展学習に取り組んだ。



【資料8】ミニ授業の様子

第7時 調べたことをもとに学習問題について話し合い、学習のまとめをする

作成した通知表をグループで共有し、最終的に自分はどちらの家来になるのかを発表させた。発表を聞いた後、疑問に思ったことや共感したことを話し合わせた。

児童Aは織田信長を選び、児童Bは豊臣秀吉を選んだ【資料9】。授業の最後に学習計画の振り返りを行った。ほとんどの児童が計画に沿って学習することができた。

【資料9】選択した武将とその理由が書かれたプリント
児童A(左) 児童B(右)

7 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

① 手立て1（自ら学ぶ力を高めるための手立て）について

学習計画表と「学習の手引き」を活用することで、児童は自分のペースに合わせて学習を進めることができた。教師は計画表をもとに助言を行い、児童の学習を個別に支援することができた。二次元コードによる動画教材は、児童が自分に必要だと感じる内容を選んで視聴し、学習のつまづきを自力で解消することに役立った。児童Aは動画教材を活用しながら自力で学びを進め、多面的に武将を調べてまとめることができた【資料10】。また、児童Bを含めて学級の多くの児童が実践前と比べ、進んで学習に取り組めたことがアンケート結果から分かった【資料11】。自ら学ぶ力を育む手立てとして有効であった。

一方で、振り返り欄の活用は「計画より遅れた」といった進捗確認にとどまった。今後は、学習の気付きや次の目標を記述するなど、自ら学ぶ力を高めるために振り返りを工夫していく必要がある。



【資料10】児童Aのプリント

【資料11】実践前（6月）と実践後（10月）のアンケート結果の比較

	実践前	実践後
自ら進んで学習しているに「はい」と回答した人数	10人	25人
学ぶことに楽しさを感じているに「はい」と回答した人数	9人	25人
児童A 社会の授業は難しいと感じているか	はい	どちらかというとはい
児童B 進んで学習に取り組んでいるか	いいえ	どちらかというとはい

② 手立て2（学習に楽しさを感じられるようにするための手立て）について

複数の学習コースを設定したことで、児童は自分に合った方法を選び、主体的に学習を進めることができた。発展学習では、学んだ知識を活用しながら活動に取り組む姿が見られ、学習の楽しさを感じている場面が多かった。縄文の単元では、埋蔵文化財センターの講師の授業で地元から出土した土器に直接触れ、学んだ知識を活かしながら楽しく参加することができていた。実践前と比べて、楽しく学習に取り組んでいる児童が大幅に増えているのが【資料11】から分かる。学習の楽しさを感じられるようにするための手立てとして有効であった。しかし、実践2では時間が不足し、発展学習の時間を十分に確保できない児童が多く、戦国の単元で地域教材を活用できなかった点は課題である。

③ 抽出児童の変容と本研究仮説の検証

抽出児童Aは、実践前には自力での解決よりも他者へ頼る傾向があった。しかし、学習計画表や動画教材を活用する中で、自分で資料を調べたり、必要に応じて教師へ質問したりしながら学習を進めるようになった。実践2ではミニ授業も活用し、自力で課題解決しようとする姿が見られた。

抽出児童Bは、実践前には学習に対して受け身な姿勢が見られた。しかし、自分で学習方法を選択できる環境の中で興味・関心をもった内容を主体的に調べるようになり、発展学習にも取り組むことができた。

また、児童A・児童Bを含め、多くの児童が実践前と比べ、進んで学習に取り組めたことがアンケート結果から明らかとなった【上記 資料11】。

これらの結果から、「学習の個別化・個性化」を重視し、自由進捗学習を基盤とした本実践は、児童の主体性と学習意欲の向上に一定の効果が確認できた。したがって、本研究の仮説についても一定の有用性が認められたものと考えられる。

(2) 今後の課題

今回の実践では、振り返りが進捗確認にとどまったため、学習計画表に学びの気付きや次の目標を記述する欄を設けるなど、児童が学習を内省し、次の学びにつなげる工夫が求められる。また、発展学習の時間を確保するため、学習計画の立て方を改善し、児童が余裕をもって取り組めるようにする必要がある。さらに、地域教材の活用は、学習を身近に感じさせるのと同時に、学習に対する楽しさや意欲を高める有効な手立てであるため、次回からは事前に地域資料を収集し、単元計画に組み込むことを検討したい。

加えて、学習の進捗や成果を共有する場を設け、児童同士が学びを比較・交流できるようにすることで、協働的な学びの要素を強化したい。さらに、学習コースの選択で、児童が自分に合った方法を選ぶためのガイドを充実させることも必要である。選択の理由を振り返りに書き残すことで、自己調整力の育成につながると考える。

最後に、教師の指導の課題として、自由進捗学習における個別支援の質を高めることが挙げられる。児童の計画表や振り返りをもとに、学習のつまづきや興味・関心を早期に把握し、適切な助言を行うための観点を整理する必要がある。こうした改善を重ねることで、児童が自ら学び、学習に楽しさを感じる授業づくりをさらに充実させていきたい。

〈参考文献・HP〉

- ・中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築を目指して」
- ・独立行政法人教職員支援機構HP「単元内自由進捗学習 上智大学教授 奈須正裕」
- ・千葉県総合教育センターHP「令和の日本型学校教育における個別最適な学び」